

近世の京都・鴨川における河川環境

吉越昭久

- I. はじめに
- II. 研究の方法
- III. 河川景観
 - (1) 堤防と護岸
 - (2) 河川敷と流量
- IV. 利用と災害
 - (1) 水利用と水災害
 - (2) 河川敷および河川周辺の土地利用
- V. おわりに

I. はじめに

近年、都市部を中心に海や河川周辺においてウォーターフロントの開発・整備が盛んに行われるようになって、景観的にも機能的にも水辺が以前とは大きく変わりつつある。

この傾向は京都においても例外ではないが、近世の名所図会の類などをみると、この現象の起源をもっと早い時期に設定してもよいのではないかと考えることができる。京都の都市としての歴史は古く、平安京の造営時にまで遡ることは可能であろう。筆者¹⁾が既に触れているように、京都では平安時代から貴族を中心に水を愛で、河川で遊ぶことが行われていたが、近世になると庶民のレベルにまで、水に親しむという意識が広まり、ウォーターフロント・ブームと呼びうる現象さえ起こっていたのではないであろうか。

近世の鴨川において、ウォーターフロント・ブームが生じていたことを検証するためには、当時の政治・経済的観点、当時の庶民にそのよ

うな行動を起こさせた社会・心理的観点、さらには鴨川が人々を引きつけるだけの魅力ある河川環境をもっていたかどうかなどの観点から、アプローチしなければならないと考える。これらのいずれの観点も明らかにしなければ、正確な把握はできないことはいうまでもない。しかし、紙幅の関係上、前述の二つの観点の検討は別の機会に行うこととし、本稿では最後の観点、つまり近世の鴨川における河川環境を明らかにして、そこがウォーターフロントの適地になりえたかどうかを考察してみたい。内容的には、河川環境の復原ということになる。その結果は、他の二つの観点を今後考察する上で、基礎的なデータになるものと考えられる。

ところで、このような観点から、過去の鴨川の河川環境について研究したものは、筆者^{2),3)}の他にはみあたらないようである。前者は、平安京造営時以降の水文環境の変化を主に文献によって述べたものであるし、後者は絵を用いて近世の河川環境を明らかにしたもので、本稿の前段階の研究として位置づけることができる。

他に、最近のものに限ってみても、関連する研究は多数存在する。歴史学では、洛中洛外図屏風を景観分析に用いた研究が多い。例えば、黒田⁴⁾は、それを都市図の機能をもつものとして扱っているし、瀬田⁵⁾と川嶋⁶⁾はそこに描かれた五条橋付近の中洲にあった寺院について考察している。他に、地図や絵を扱った研究が、歴史学や歴史地理学の分野にみられる。例えば、園田⁷⁾は、鳥瞰図をもとに洛中と洛外との比較を行っているし、奥平⁸⁾は、四条河原の納涼の絵からそ

の風俗を研究した。矢守^{9),10)}は、絵や地図についての多くの研究を体系化して示したし、小椋¹¹⁾は絵から当時の植生を復原した。絵や地図を中心に扱ったものではないが、歴史学の分野では他に、京都の河川を文化史的に記述したもの¹²⁾もみられる。歴史地理学の分野では、足利¹³⁾が平安京における鴨川の堤防建設について新たな検討を加えているし、武藤¹⁴⁾は歴史的景観に触れている。災害史の分野では、中島¹⁵⁾が文献から鴨川の洪水史をまとめているし、小笠原¹⁶⁾も古気候の復原を試みている。他に、建築学の分野から鴨川周辺の開発過程を明らかにした日向¹⁷⁾や、河原町の成立を民俗学的に研究した森栗¹⁸⁾の成果などがある。

II. 研究の方法

ところで、本稿における研究の方法であるが、まず近世の鴨川に関する絵・地図・文献¹⁹⁾をデータとして用いて、当時の鴨川の河川環境を復原する。ここで、これらのデータに関して検討しておかなければならない点がいくつかある。

まず、絵や地図が事実を示しているかという、いわゆる吟味の問題である。確かに、絵や地図では、雲や河川の流れのように、部分的には独特な描き方をしている場合があって、全てを信用する訳にはいかない。しかし、橋や社寺などランドマークとなるような事物は、概して正確に描かれていることが多い。この吟味の問題について、小椋²⁰⁾は絵に関する情報を可能な限り増やし、また他の作者によって描かれた絵と比較することで、解決できると述べているが、本稿ではこの手法を用いることによって、データを吟味して使用した。また、地図を用いる場合、方位が正しくなかったり、洛中と洛外とでは縮尺が異なるという問題もあるが、対象とした鴨川では、橋などの存在によって正しい情報を読み取ることができた。従って、絵や地図の内容については、特に詳細な読み取りを行うのでなければ、ある程度信頼できる事実を把握することができるであろう。なお本稿では、用いたデータの中でも特に絵と地図に重点を置き、文献は

補足的に使用した。

次に、検討すべきことは、絵や地図の刊行年と内容との整合性の問題である。各データの内容は、その刊行年代以前の状態を示すものであるにしても、必ずしもその時期のものとは限定できない。刊行年代とその内容の検討は、それ自身一つの研究になるほど重要なことであるが、多くのデータを扱ったので十分な検討にまでは至っていない。本稿では、絵や地図の内容は、その刊行年の少し前の状態とみなし、しかもあまり時期を特定せずに、多少幅をもたせた時期のものとしてとらえることで、この問題を処理した。

ところで、本稿では河川環境をどのように規定しているかを明らかにしておかなければならない。前述のように、使用するデータが限定されているので、そこから求められる河川環境も、現在一般に考えられているものとは多少異なるものになることは止むをえない。そこで、筆者は河川環境を図1のように規定した。まず、堤防・護岸、河川敷、流量、河川周辺の市街地・道路など、河川景観に含まれるものと、水利用、土地利用、災害など河川の利用と災害に含まれるものとに大別し、これらを総合したものを、河川環境と規定することにした。

また、対象にした地域は、京都盆地の北東部を南に向けて流れる鴨川(淀川水系桂川の支流)のうち、主として高野川との合流点から七条(JR東海道本線より少し上流)あたりまでである。ここは、平安時代以降、都市としての京都の中心部のすぐ東側に位置し、人々にとっては身近な場所であり、前述のような研究を行う上では

| | |
|---|-------|
| ① 堤防・護岸 ② 河川敷 ③ 流量 ④ 河川周辺の市街地・道路 | 河川景観 |
| ⑤ 水利用 ⑥ 土地利用 ⑦ 災害 | 利用と災害 |

図1 河川環境の概念規定

好都合な地域である。なお、研究対象にした時代は近世全般であるが、時期による変化などに触れる必要がある場合には、具体的な年代を扱った。

III. 河川景観

(1) 堤防と護岸

平安時代以降の景観については、最近になって足利²¹⁾によって地図化されたり、金田²²⁾によって平安京の復元模型の解説が行われたりしている。しかしそれらは、近世の鴨川の堤防や河川敷の状態に、特に焦点をあてたものではない。

これまでに、鴨川の具体的な洪水の記録²³⁾はみられるものの、堤防工事の記録はあまり存在しない。しかし、応急工事などは行われていたことは確かであろう。それらの工事の中でも特筆すべきは、寛文10(1670)年に完成したいわゆる寛文新堤の工事²⁴⁾である。作成年代は不明であるが、おそらくこの工事に伴って作られたと考えられる「賀茂川筋絵図」(図2)によれば、寛文新堤は左岸で25町(約2.7km)、右岸で31町(約3.4km)の延長があった。またその規模は、幅が8間(約14.5m)、堤高が2間(約3.6m)というもので、石垣の構造になっていた。

ところで、よく知られているように、近世中期頃までの治水技術は、関東流(伊奈流)と呼ばれる工法が一般に採用されていた。それは、

河道を蛇行させて、乗越堤や霞堤などの堤防と堤内に遊水地を設けることで、洪水を調節しようとする方法である。ところが、近世中期以降になると、農業の発達に伴って農地を洪水から守る必要性が生じ、紀州流と呼ばれる工法が採用されるところがでてきた。紀州流の特色は、河道を直線化して連続堤を造るもので、堤内に洪水流を入れないことをねらった。堤防を強化するために、水制を配するようになったのも、この工法の特色である。紀州流の採用によって、これまで遊水地であった河畔の流作場などが、新田開発され、農業に大きな変化が起こった。

このような経緯をもとに、鴨川の寛文新堤をみると、いくつかの形態的な特徴があることがわかる。一つは、この堤防は完全な意味で連続堤とはいえない、ということである。つまり、寛文新堤は、鴨川の支流の合流点や道路などによって、途中で何箇所も途切れていたことが、前述の「賀茂川筋絵図」から判断される。しかし、それは堤内に遊水地を伴ってはならず、関東流の工法によったものではないことは確かである。もう一つの特徴は、多くの絵などをみると、この堤防は現在ある一般的な堤防とは異なり、堤防の高さは市街地と同じであって、むしろ石垣の護岸をイメージした方が実態に近いと思われることである。従って、洪水対策のためにはあまり効果がなかったようで、寛文新堤の

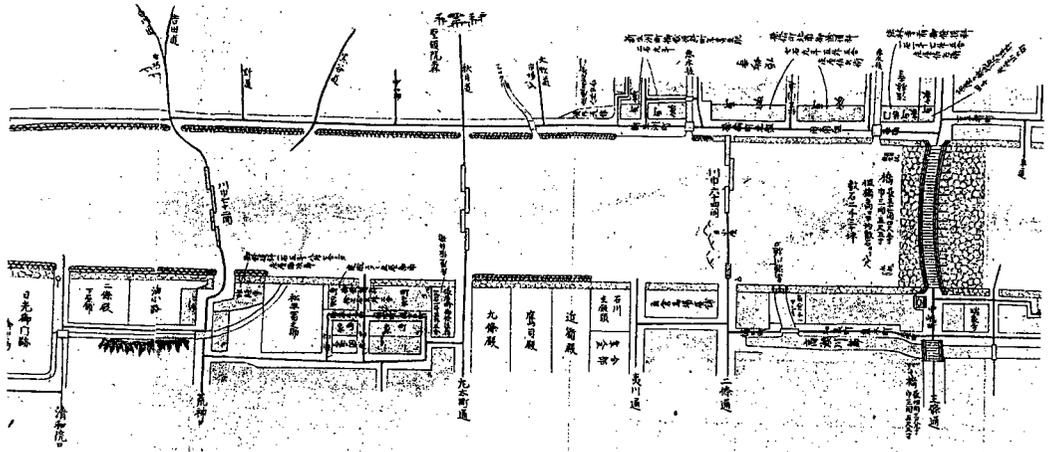


図2 賀茂川筋絵図(年代不詳) (『京都古地図散歩』平凡社, 1994)

建設以降も頻繁に洪水が発生してきた²⁵⁾。しかしその反面、河川敷に降りやすいという特徴をもったこの堤防は、ウォーターフロントには適していたことになり、河川敷の利用には大きな効果を発揮することとなった点は指摘しておかなければならない。

寛文新堤は、後述するように京都の市街地の形成にも影響を与えている。つまり、かつて秀吉が建設させたお土居が洛中と洛外とを分けたように、この堤防は河川敷と市街地とを明確に区分することになった²⁶⁾。

その後、鴨川の堤防に大きな変化がみられたのは、幕末の安政2、3（1855、56）年のことで、浚渫とともに寛文新堤の上に更に3尺（約90cm）の高上げが行われた時である。堤防の建設の結果当然予測されたことであるが、土砂の堆積によって天井川化が起こった。高上げは、洪水を防ぐために実施された事業であった。

このように、近世を通して、鴨川の堤防については多少の変化はあったものの、寛文新堤が維持される形で、推移していったとみて大きな誤りはなからう。しかし、護岸については文献

などが少なく、その変化を詳細に追うことは難しい。

護岸とは、堤防などが崩壊することを防ぐようにすることで、絵などから鴨川ではいろいろな方法が採られてきたことがわかる。最も一般的な方法は、石積みをするもので、「七条河原」の絵や「改正京町細見大成」の地図などからも、石垣の存在を読み取ることができる。石は堤防の法面だけでなく、河床に敷かれた場合もあったことは、「賀茂川筋絵図」に、三条橋や五条橋の橋脚部分に敷石があったことが示されていることからわかる。このように、石を積んだり、敷いたりした他に、木の杭や板を用いて堤防の崩壊を防いだ部分もある。例えば、「四条橋」の絵は、寛文新堤の建設よりかなり後のものであるから、この場所は本来ならば石垣であったはずである。しかし、絵の描き方は、明らかに木の杭をうったようになっている。そこで、別の画工が別の角度からこの場所を描いた絵を検討してみよう。「大和橋」はそうした絵の一枚であるが、そこでも明らかに木の杭であったことが示されている。しかし、このようなことを検討



図3 三本木（「拾遺都名所図会」天明7（1787）年）

することができる場所は限られており、遠景の絵から護岸の材質まで判断することは難しい。鴨川を全体的にみると、石垣の護岸が中心で、補助的に木の杭や板で護岸がなされている箇所もあったことになる。

また、護岸に水制を用いることも行われていた。「四条河原新橋之図」をみると、橋脚を守るために上流側に方形牛と思われる水制が橋と並行して設置されているし、「松原河原徒杠」のように木の杭をうっただけの単純な水制が描かれた絵もある。また、堤防や高水敷を守るための蛇籠もよく用いられている。例えば、「三本木」(図3)は、丸太町付近を東から西にみた絵であるが、左岸に蛇籠が木の杭で固定されている様子が描かれているし、前述の「賀茂川筋絵図」にも兩岸に蛇籠の存在が認められる。他に「三本木」には、右岸に凹凸のある高水敷の末端が描かれているが、これはおそらく土出しと呼ばれる水制で、水勢を弱める効果をねらったものであろう。

以上のことから、近世の鴨川の堤防・護岸は不完全なものではあったが、一応整備された状態にあったことがわかる。しかし、寛文新堤の建設以降にも、堤防の崩壊などに伴って、応急工事の結果、護岸が石垣から木の杭に変わるなどの変化もみられたことが推測される。

(2) 河川敷と流量

河川敷は、通常水が流れている低水路敷と、出水時に水をかぶる高水敷(河原や中洲などと呼ばれることもある。本稿では、必要に応じてこのような表現をしている部分がある。)とから成る。河川敷に関して、本稿で明らかにしたい点は二つある。その一つは、河床の構成物質と状態である。河床を詳細に描いた絵はあまりないが、「松原河原徒杠」(図4)などでは中ないし小礫が堆積していることが明瞭に示されている。その他に、アシや雑草などの草本類、多少背の高い木本類などがみられ、この状態は現在とさほど変わらない。ただし、礫の量が現在よりかなり多く、そのために一回の出水で河床の様子は大きく変わったものと考えられる。絵や地図から、河床の正確な状態を読み取ることはあまり意味がない。しかし、あえて当時の鴨川の河川敷の状態を想像するならば、水流がいくつも存在し、それらが分流と合流を繰り返し、所々に中洲が形成されていた、というような景観が想像される。この景観は、近世全般を通し、そう変化しなかったと考えてよい。

河川敷に関して明らかにしたいもう一つの点は、川幅である。鴨川の川幅を類推することができるデータが、「賀茂川筋絵図」やその他の地図²⁷⁾の中にある。これらの地図には、主要な橋の規模が示されているのである。また、「五条橋」

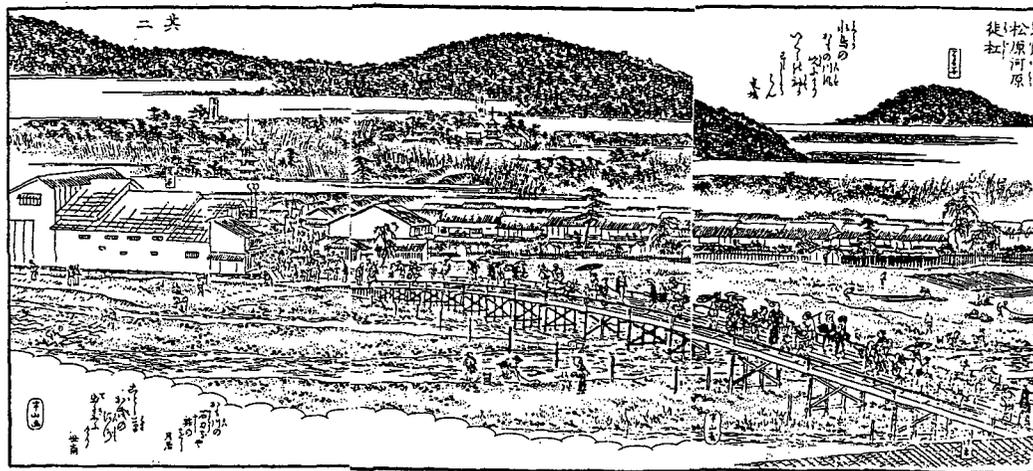


図4 松原河原徒杠(「花洛名勝図会」元治元(1864)年)

などの絵から判断すると、三条や五条の大橋は、川幅いっぱいには架けられていることがわかる。すると、大橋の長さが鴨川の川幅と考えるとよいことになる。データとして用いた地図ごとにその数値に多少の幅があるが、大橋の架かる地点でおよその数値がでてくる。つまり、メートルで表現すると、三条で103~110m（現在73m）、四条で91~100m（同65m）、五条で100~130m（同67m）であった。この値は現在の川幅の1.5~1.8倍くらいになる。近世における鴨川の川幅は現在よりかなり広く、しかも河床が土砂の堆積によって高くなり、周辺の建物が低かったのもので、感覚的には広々とした景観が想像される。今述べた川幅は、寛文新堤が建設された以降のものであるが、それ以前の状態は、例えば五条から七条にかけての右岸などのように部分的には300m以上になるようなかなり広い所²⁸⁾があり、川幅が一定していなかったものと考えられる。寛文新堤の建設は、鴨川の川幅を狭くし、しかも直線化した点で重要なできごとであった。

近世の鴨川の流量については、ほとんどわかっていない。日本の近世において、河川の流量や水位を連続して観測した例は、江戸の隅田川²⁹⁾の他には筆者の管見にない。本稿で用いたデータの中には、「三本木」の絵のように、豊かな流れが描かれ、流速もかなりあるようにみることができるともある。しかし、水の流れについての表現は、空の雲などと同様に一定のパターンで描かれるために、それをそのまま認することはできない。仮に正しく描かれたものであるとしても、ある特定の日の流量を表わしているに過ぎない。従って、流量の詳細な検討は、絵や地図からは不可能ということになる。鴨川の水深は、「四条河原遊楽図」にみられるように、人の膝位までであるように描かれていることが多い。しかし泳ぐのでない限り、人がそれより深い所にまで入ることはまずない。従って、水深を示す絵や地図からも、それ以上の情報を得ることはできない。このように、流量に関しては絵や地図を用いることは有効な方法ではない。ただし、水利用や水災害などからも若干の

検討はできるので、この点については後述してみよう。

以上のような検討内容と後述する水利用・水災害なども含めて総合的に判断すると、流量的には現在とほぼ同じか若干多いくらいの量が、広い河川敷の中を、幾筋かに分かれて流れ、洪水と濁水が交互にあらわれるような不安定な状態が想定される。

IV. 利用と災害

(1) 水利用と水災害

まず、鴨川の水利用についてであるが、次の4つにタイプ分けして、それぞれのタイプごとに事例と特徴を求めてみよう。

まず第1のタイプは、舟運である。鴨川で舟運が行われていたことは、「山城国風土記」³⁰⁾などによって知ることができ、³¹⁾には、長保6（1004）年に鴨川の東に舟運を目的とする新しい河川を掘ったことが記されているなど、他のいくつかの文献³²⁾からもわかる。しかし、土砂の堆積が著しく、条件的には舟運にあまり適していなかったためか、文献の量はそれほど多くはない。近世に入ると、焼失した方広寺大仏殿の再興の資材を運搬するために、鴨川の舟運ルートが、角倉了以によって確保された。この結果、慶長16（1611）年になって、三条大橋まで舟が遡ることができるようになった（「当代記」³³⁾など）。

しかし、近世全般をみれば、舟運の主体は鴨川ではなく、高瀬川にあった。高瀬川は鴨川そのものではないが、その水を引いているので、ここで若干触れておく必要がある。高瀬川は、慶長19（1614）年に、同じく角倉了以によって完成された運河で、鴨川の西に沿って南流している。二条樵木町から鴨川の水を取り入れて、そこから伏見に至る約10.2kmの長さの運河である。「角倉文書」³⁴⁾によると、高瀬川の幅は4間（約7.2m）あり、9箇所こりきの舟入りと、2箇所こりきの舟廻敷を備えたもので、ここに吃水を浅くした15石積の高瀬舟が159隻就航し、上りは木材・薪炭・米穀・塩などを、下りは工芸品などを運ん

だという。鴨川に比較して、高瀬川は流量が安定していたので、大坂との交流に極めて重要な役割を果たした。高瀬川は、舟運面での鴨川の交代を果たしたのである。高瀬川の完成以降、鴨川には小舟が多少通る程度で、舟運の機能はほとんど失われていた。

鴨川における2つめの水利用のタイプに洗浄があげられる。「松原河原徒杠」の絵には、京友禅の水洗いが行われている様子が描かれているし、五渡亭国貞の版画、「四条河原白人行会図」にも洗濯をしている様子が見られる。その他、顔を洗ったり、牛馬を洗ったりしている絵もあり、様々な洗浄が日常的に行われていたと考えられる。これらは、河川の流量が多くない暖候期に行われ、近世を通じて大きな変化はなかったであろう。

第3の水利用のタイプに、漁業がある。釣、網などによって魚を獲ったり、それをいけすに入れておくことなども行われたことが、「四条河原遊楽図」や「生洲」の絵などから知られる。魚種はおそらくアユ・カワムツ・フナなどであったろう。

第4の水利用のタイプは、その他全般であり、具体的には、水汲み、水泳などがそれである。また、かつては禊の川として、宗教的な行事にもしばしば利用されてきたが、近世に入ると宗教的な色合いを急速に薄めていった³⁵⁾。

以上、4つにタイプ分けして、鴨川の水利用をとらえてきたが、全体的にいうなれば生活密着型の特徴を示し、京友禅の洗浄などを除けば、京都に限らず他の規模の大きな都市でも一般的にみられたものであったろう。

このような利用ができた反面、鴨川は災害をももたらした。中島³⁶⁾がまとめた鴨川の歴史的な洪水の記録をみると、時期的には800~900年代前半、1400~1500年代前半、1700年代あたりに洪水が多かったことがわかる。それらの原因の多くは、前線性の豪雨によるものであったという。しかし、文献には橋の流失を示す記録はあるものの、流量、湛水深など被害の程度を知る手がかりはほとんどない。中島はその研究の中で、例えば元文5(1740)年の洪水では、四条付近で二階まで浸水したとか、二条河原で増水



図5 賀茂川浚土砂運送略図(『明治以前日本土木史』岩波書店、1936)

6尺などというかなり具体的な記述がなされている場合もあることを紹介している。しかし、その例は少なく、流量の検討や被害地域の詳細な把握までには至らない。長い歴史の中でみる限り、近世は、洪水が多かった時代と位置づけることができるであろう。また、洪水と反対の水災害、濁水も、洪水ほどではないにせよ、頻発してきたことも事実である³⁷⁾。

このような水災害の原因を考える場合、降水量の検討が不可欠である。しかし、水越ら³⁸⁾の古気候学の研究が大きな成果をあげつつあるものの、特定の洪水の原因を検討できるまでの段階には達していない。

そこで、次に洪水の原因を別の面からとらえてみたい。それは、先にも触れたように鴨川の天井川化についての検討である。寛文新堤の建設によって、河道をこれまでより狭く固定したために、河床に土砂が堆積するようになり、その対策として堤防の嵩上げをしなければならなくなった事情については、既に述べた。鴨川が天井川化したことをうかがわせるよいデータがある。それは、図5に示した「賀茂川浚土砂運送略図」である。天井川化対策として実施した浚渫工事の中でも、安政3（1856）年のものは最大の規模であり、それを描いたのがこの絵であった。下京、祇園の住民などが申し合わせて拠金し、連日数千人の規模で浚渫の作業が行われている様子がよくわかる。このような鴨川の天井川化は、洪水が発生した場合、被害を大きくする要因の一つである。治山事業が充分行われておらず、しかも花崗岩の風化土壌であるマサが流域の北東部の山地（比叡山～大文字山）を中心に分布しているために、なお一層土砂の運搬・堆積が活発であった。

(2) 河川敷および河川周辺の土地利用

本稿でデータとして用いた絵や地図から知ることができるだけでも、多くの土地利用の形態がある。河川敷および河川周辺の土地利用は、日常的なものと非日常的なものに大きく分類することができる。日常的なものとしては、河

川敷を流作場・舟置場・布干し場として利用したり、橋を架けたり、中洲に寺院を立地させたりして利用する他に、河川周辺は、道路として利用したり、あるいは家などの建造物を建てたりした他、高札場としても利用された。とりわけ、寛文新堤の建設によって旧河川敷が開発され、市街地に組み入れられた所は、遊興的な性格をもつ街に変貌していった。また、水や河川敷をながめて楽しむことも、日常的な利用に含めて考えることもできる。

一方、非日常的な土地利用としては、大部分は夏季に限定されるが、河川敷を納涼の場として利用し、多くの芝居小屋・見世物小屋・店・床を一時的に立地させ、多くの人がでて楽しんだ。その際に、河川敷で相撲をとったり、弓を射たりすることも、行われたようである。

このように多くの土地利用の形態のうち、本稿では紙幅の関係から、日常的なものの例として橋と流作場を、非日常的なものの例として夏季の納涼をとりあげて述べてみたい。

まず、橋についてであるが、これは洪水に伴って流失することが多く、それに関する文献もかなりある³⁹⁾ので、橋ごとにその経緯を述べることは省略したい。橋には、河川敷全体に架けられた形の大橋と、河川敷内の水が流れている部分だけに架けられたいわゆる仮橋の二つのタイプがあった。鴨川の本稿の対象地域内において、近世を通して、架け替え期間を除き、ほとんどの期間にわたり大橋であったのは、公儀橋であった三条橋と五条橋⁴⁰⁾だけであった。大橋の例を三条橋でみてみよう。三条大橋は、東海道の西の起点として道路交通上重要で、本格的な大橋になったのは天正18（1590）年⁴¹⁾のことであった。現在の三条大橋の欄干の擬宝珠は天正18年のものを使っている。橋の規模は、「京町絵図細見大成」によれば、長さ61間（約109m）、幅3間（約5.5m）で、河床からの高さは2.5mほどであった。大橋は、欄干もついて、太鼓橋状に中央部がふくらんだ構造であった。しかし、大橋以外の橋は、二、三枚の板を木の杭にのせただけの欄干もない簡単な構造で、まさに仮橋であった。

この橋は、水流がある部分だけに架けられ、水面上の高さも低かったので、流量が増せば、水をかぶったり、流失することもたびたびあった。他にも、道路交通には直接かかわらない橋も存在した。それは、大橋や仮橋以外の板一枚程度の小規模なもので、夏季の納涼の時期に中洲に渡るために数多く架けられたことが、「四条河原夕涼之体」の絵などから知られる。大橋と仮橋をあわせて、本稿の対象地域には10~11⁴²⁾の橋が存在していたが、中洲に渡るための橋の総数はわからない。

次に流作場についてであるが、前述の「賀茂川筋絵図」には、堤外地にいくつもの流作場があったことが記されている。特に、高野川との合流点付近にあるものの規模が大きく、その周囲を蛇籠で囲み補強していたことがわかる。しかし、この耕作形態や、消滅の時期などを示す文献には、筆者はまだ目を通していない。

鴨川の河川敷を利用した納涼は、京都の夏季の風物詩でもあった。出雲の阿国が、五条河原で歌舞伎おどりを始めたのは、慶長8（1603）年の春といわれている⁴³⁾。これ以降、鴨川の河川

敷が芸能の表舞台にできるが、遊女歌舞伎などを経て、元和年間（1615~1624）には、多くの芝居小屋が建つようになった。その後、芸能の中心が五条河原から四条河原に移ることになるが、そのきっかけは前述の寛文新堤の建設であった。奥平⁴⁴⁾の指摘によると、納涼の風習は、元和から寛永にかけて、歌舞伎の四条河原への集中を受けて、自然発生的に四条河原にできた床などが、寛文新堤の建設以降、祇園祭の一環にとりこまれていったのではないかとする。その様子は、「四条河原夕涼」（図6）、「鴨川遊楽図」、「四条河原遊楽図」などの絵によく示されている。

過去におけるどのような行為をウォーターフロントと呼ぶかに統一のとれた見解はないが、鴨川の納涼はその一部と解釈することができるのではないだろうか。すると、京都において、ウォーターフロントが庶民のものとして定着したのは、近世の前半から中頃のことと考えることができる。このことは四条河原の納涼が文献に登場する時期が17世紀⁴⁵⁾であることも矛盾しない。

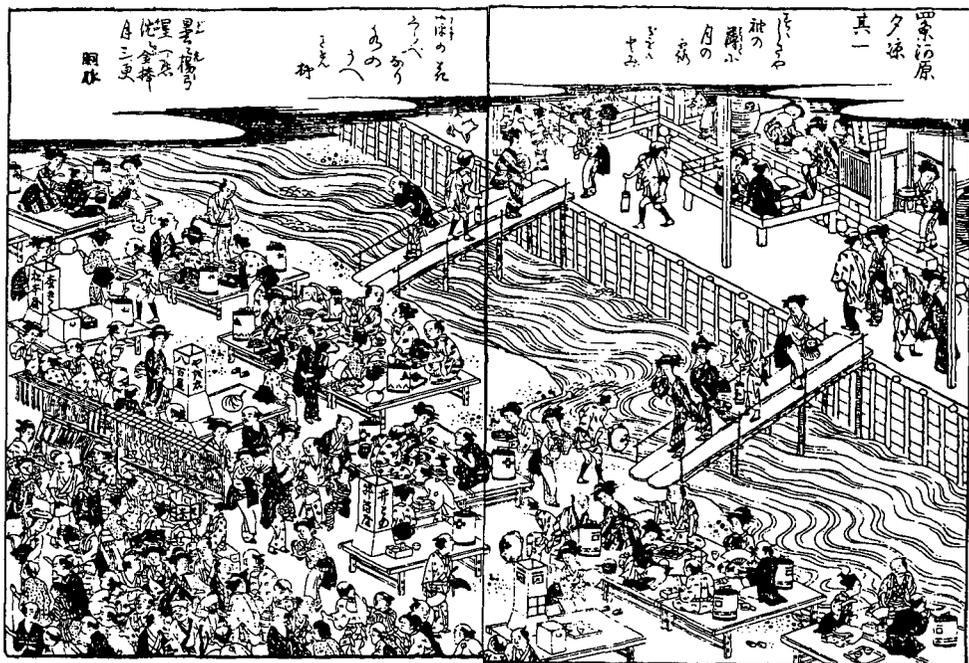


図6 「四条河原夕涼」（『都林泉名勝図会』寛政11（1799）年）

V. おわりに

以上のように、河川環境の構成要素のそれぞれの特徴を求めた結果、次のような点を明らかにした。寛文10(1670)年に完成した寛文新堤は、京都にいろいろな影響を与えた。まず、この堤防の完成によって、鴨川の川幅が100m前後にまで狭められ、しかも直線化された。堤防によって市街地に組み入れられた部分は、開発され新地となり、遊興的な街に変わった。このように、寛文新堤は、河川敷と市街地とを明確に区分することになった。河川敷は、その後土砂の堆積によって、天井川化して、洪水の危険性を増大させた。河川敷の中では、水流が幾筋にも分流したり合流したりして流れた。そして、その間には中洲があり、両サイドの高水敷と共に礫より構成されていた。鴨川では舟運・洗浄・漁業などいろいろなタイプの水利用が行われたし、その河川敷は流作場・舟置場・架橋・納涼などに利用された。特に、夏季の納涼は、まさにウォーターフロント的の行為であったと解釈することができる。

このような水に親しむ行為が一般化した理由は、いくつか考えられる。まず、寛文新堤が低かったため、河川敷に降りやすかったことがあげられる。また、近世の鴨川の水利用の状態から考えて、水質が良好だったことが指摘される。更に、広々とした河川敷が、市街地に隣接する位置に存在したことも大きい。また、鴨川のこれまでの楔の場、処刑の場、死体置場などという、暗いイメージが徐々に薄れ、芸能の場、日常的な水利用・土地利用の場という、明るいイメージに変化したことも、追い風になった。このような理由によって、近世の前半から中頃にかけて、鴨川においてウォーターフロント・ブームが起こり、庶民のレベルにまで、水に親しむという行為が定着したものと考えられる。

ところで、本稿には、いくつかの課題が残されたと考える。まず、考察に用いたデータの問題である。名所図会などの絵についてみると、それはトラベルガイド的な性格をもっているた

めに、よい状態、きれいな側面しか描いておらず、全体像をとらえたことにはなっていない。これについては、更に多くの絵や文献などを今後利用していくことで、修正していかねばならない。また、絵を描いた季節に関しても、夏季を中心とした暖候期の考察が主体であったことも問題であろう。これらは、絵を主要なデータとして使用する以上は、避けて通れない問題である。また、今後、特定の時期ごとに鴨川の川幅などを確定していくためには、ボーリングデータや考古学的な発掘データについてもとりこんでいかねばならない。

(立命館大学文学部)

[注]

- 1) 吉越昭久(1987): 京都の歴史的な水文環境—京都盆地を中心に—(新井 正・新藤静夫・市川新・吉越昭久『都市の水文環境』共立出版), 201~252頁。
- 2) 前掲1) 201~252頁。
- 3) 吉越昭久(1993): 名所図会類にみる河川景観—近世の京都、鴨川を中心に—, 奈良大学紀要, 第21号, 145~156頁。
- 4) 黒田紘一郎(1987a): 都市図の機能と風景(小山靖憲・佐藤和彦編『絵図にみる荘園の世界』東京大学出版会), 127~147頁。
黒田紘一郎(1987b): 洛中洛外屏風についての覚書, 日本史研究, 第297号, 29~48頁。
- 5) 瀬田勝哉(1988): 失われた五条橋中島, 月刊百科, 第304号, 7~18頁。
- 6) 川嶋将生(1992): 『中世京都文化の周縁』思文閣出版, 410頁。
- 7) 園田英弘(1992): 京都図の思想—洛中と洛外の間—, 日本研究(国際日本文化研究センター紀要), 第7集, 71~87頁。
- 8) 奥平俊六(1989): 四条河原納涼図, 古美術, 第91号, 71~81頁。
- 9) 矢守一彦(1984): 『古地図と風景』筑摩書房, 343頁。
- 10) 矢守一彦(1992): 『古地図への旅』朝日新聞社, 296頁。
- 11) 小椋純一(1992): 『絵図から読み解く人と景観

- の歴史』雄山閣出版、238頁。
- 12) 森谷尅久・山田光二 (1980)：『京の川』角川書店、215頁。
- 13) 足利健亮 (1991)：9世紀の平安京における堀川と鴨川堤をめぐって—村井康彦氏の批判に答える—、京都府理蔵文化財論集、第2号、411～422頁。
- 14) 武藤直 (1978)：鴨川沿岸の歴史的景観—領域変遷史のための景観分析ノート、地理学報、第17号、47～56頁。
- 15) 中島暢太郎 (1983)：鴨川水害史 (1)、京都大学防災研究所年報、第26号B-2、75～92頁。
- 16) 小笠原洋子 (1993)：京都における1854年から1871年の気候、お茶の水地理、第34号、40～47頁。
- 17) 日向進 (1990)：近世京都における新地開発と地面支配人—鴨東、河原の開発をめぐって—、日本建築学会計画系論文報告集、第407号、129～137頁。
- 18) 森栗茂一 (1988)：河原町の成立について—墓地とケガレの問題から—、日本民俗学、第174号、27～53頁。
- 19) 絵：「洛中洛外図屏風」(舟木家旧蔵本) 1615頃、武田恒夫ほか (1978)：『日本屏風絵集成 第11巻 風俗画 洛中洛外』講談社、183頁所収。「ふな入こ里木町」『京雀』7巻、1665、野間光辰編 (1967)：『新修京都叢書 第1巻』臨川書店 (①) とする、386頁所収。「生洲」『都名所図会』1巻、1780、野間光辰編 (1967)：『新修京都叢書 第6巻』臨川書店 (②)、755頁所収。「三條大橋」『都名所図会』1巻、1780、②所収。「四條河原夕涼之体」『都名所図会』2巻、1780、②所収。「五條橋」『都名所図会』2巻、1780、②所収。「七条河原」『都名所図会』2巻、1780、②所収。「高瀬川」『拾遺都名所図会』1巻、1787、野間光辰編 (1967)：『新修京都叢書 第7巻』臨川書店 (③)、598頁所収。「三本木」(仮題)『拾遺都名所図会』2巻、1787、③所収。「砂川柳ヶ辻」『拾遺都名所図会』2巻、1787、③所収。「秋の日照」(仮題)『火の用心花紅葉都嘶』、1788、新撰京都叢書刊行会編 (1985)：『新撰京都叢書 第10巻』臨川書店 (④)、390頁所収。「四条河原夕涼」『都林泉名勝図会』1巻、1799、野間光辰編 (1968)：『新修京都叢書 第9巻』臨川書店 (⑤)、569頁所収。「大和橋」『帝都雅景一覽』、1809、竹村俊則編 (1981)：『日本名所風俗図会 8』角川書店 (⑥)、538頁所収。「祇園西門の内」(仮題)『扁額軌範』3巻、1821、野間光辰編 (1968)：『新修京都叢書 第8巻』臨川書店 (⑦)、626頁所収。「四条河原」(仮題)『扁額軌範』3巻、1821、⑦所収。「賀茂川浚土砂運送略図」1856、土木学会編 (1936)：『明治以前日本土木史』岩波書店、1745頁所収。「四條河原新橋之図」『都のにぎわい』1857、④所収。「將軍上洛の図」1863、矢守一彦・大塚隆 (1977)：『日本の古地図10 京都幕末維新』講談社 (⑧)、36頁所収。「繩手通大和橋」『花洛名勝図会』1巻、1864、竹村俊則編 (1979)：『日本名所風俗図会 7』角川書店 (⑨)、484頁所収。「四條橋」『花洛名勝図会』1巻、1864、⑨所収。「松原河原徒杠」『花洛名勝図会』3巻、1864、⑨所収。「鴨川遊楽図」年代不詳、伊東宗裕構成 (1994)：『京都古地図散歩』(別冊太陽、86号)、平凡社 (⑩)、144頁所収。「華洛四季遊楽図巻」年代不詳、⑩所収。「東山名月」江戸末期、生田耕作編 (1990)：『鴨川風雅集』京都書院 (⑪)、239頁所収。「四条河原白人行会図」江戸末期、⑪所収。「四条の芝居」江戸末期、⑪所収など。
- 地図(鳥瞰図も含む)：「平安城東西南北町並之図」1652、矢守一彦・大塚隆 (1976)：『日本の古地図4 京都』講談社 (⑫)、36頁所収。「新改洛陽並洛外之図」1653、京都市編 (1947)：『京都市史 地図編』京都市役所 (⑬)、90頁所収。「洛陽東山名所鑑」1670、新撰京都叢書刊行会編 (1987)：『新撰京都叢書 第11巻下』(古地図集)、臨川書店 (⑭)、5葉所収。「新板平安城並洛外之図」1672、⑫所収。「京大絵図」1686、⑬所収。「京大絵図」1691、⑫所収。「京絵図」1709、⑬所収。「都細見図」1711、⑬所収。「京大絵図」1723、京都府立総合資料館蔵。「京大絵図」1741、⑬所収。「京都絵図」1754、⑬所収。「懷宝京絵図」1774、⑫所収。「花洛一覽図」1808、武田恒夫監修 (1994)：『複製花洛一覽図』角屋文芸社、1葉所収。「新增細見京絵図大全」1831、京都府立総合資料館蔵。「改正京町絵図細見大成」1831、大塚隆編 (1994)：『慶長昭和京都地図集成』柏書房、141

- 頁所収。「東海道分間延絵図」19世紀初頭、児玉幸多監修(1985)：『東海道分間延絵図』第23巻、絵図編、東京美術、所収。「祇園新地細見図」1840、⑩所収。「元治元年京都大火図」1864、⑬所収。「東山全図」『花洛名勝図会』2巻、1864、⑨所収。「校正山城国全図」1865、新撰京都叢書刊行会編(1987)：『新撰京都叢書 第11巻上』(古地図集)、臨川書店、4葉所収。「賀茂川筋絵図」年代不詳、⑩所収。「京都一覽図画」幕末期、⑧所収など。
- 文献：前掲3) 145～156頁など。
- 20) 前掲11) 238頁。
 - 21) 足利健亮編(1994)：『京都歴史アトラス』中央公論社、155頁。
 - 22) 金田章裕(1995)：氾濫する川—鴨川とその治水—(村井康彦編『よみがえる平安京』淡交社)、42～43頁。
 - 23) 「義演准后日記」慶長17年8月26日条。京都市編(1981)：『史料 京都の歴史4 市街・生業』平凡社、671頁などに所収。
 - 24) 『京都府下遊廓由緒』。京都市編(1985)：『史料 京都の歴史9 中京区』平凡社、545頁所収。
 - 25) 「上月家文書」嘉永元年9月28日条。京都市編(1981)：『史料 京都の歴史12 下京区』平凡社、577頁所収。
 - 26) 西川幸治(1972)：町の変貌(京都市編『京都の歴史5 近世の展開』学芸書林)、161～178頁。
 - 27) 例えば、「山城国全図」1865、「京町絵図細見大成」1831など。
 - 28) 例えば、「新板平安城東西南北並洛外之図」1657など。
 - 29) 高橋 裕(1979)：日本における水工技術発達の概観(A. K. ビスワス著、高橋 裕・早川正子訳『水の文化史—水文学入門—』文一総合出版)、377～400頁。
 - 30) 秋本吉郎校注(1958)：『日本古典文学大系2 風土記』岩波書店、529頁。
 - 31) 「権記」長保6年3月10日条。前掲23) 671頁所収。
 - 32) 「御堂関白記」長保6年3月条、「御堂関白記」長保6年5月11日条。ともに前掲23) 671頁所収。
 - 33) 「当代記」慶長16年11月18日条。前掲23) 671頁所収。
 - 34) 「角倉文書」。前掲23) 671頁所収。
 - 35) 前掲12) 215頁。
 - 36) 前掲15) 75～92頁。
 - 37) 京都防災気象連絡会(1951)：『京都気象災害年表』、58頁。
 - 38) 水越允治(1985)：近畿・東海地方における近世の気候復元—とくに乾湿条件について—、京都大学防災研究所年報、第28号B-2、121～132頁。水越允治(1986)：近畿地方における梅雨の長期変動傾向、京都大学防災研究所年報、第29号B-2、109～123頁。水越允治(1991)：19世紀前半における近畿・東海地方太平洋側の冬の降水量の復元、人文論叢、第8号、51～57頁。深石一夫・田坂善夫(1993)：18世紀の日本における冬の気候復元、地学雑誌、第102巻2号、176～182頁など。
 - 39) 「月堂見聞集」享保13年7月条。前掲24) 545頁所収。
 - 40) 「京都御役所向大概覚書」。前掲23) 671頁。
 - 41) 「続史愚抄」天正18年1月19日条。前掲23) 671頁所収。「都のにぎわい」。新撰京都叢書刊行会編(1985)：『新撰京都叢書 第10巻』臨川書店、390頁所収。
 - 42) 前掲27)。
 - 43) 前掲12) 215頁。
 - 44) 前掲8) 71～81頁。
 - 45) 前掲8) 71～81頁。

The River Environment of River Kamo in Kyoto during the Edo Period

Akihisa YOSHIKOSHI

In this paper, I have made clear some characteristics of the river environment of River Kamo in Kyoto during the Edo period. I have made particular consideration of the river environment in terms of river landscape, its use and so on.

1. River landscape: In 1670, the new bank called “Kanbun Shintei” was constructed. This made the width of River Kamo narrower to about 100 meters, and also straightened the stream. The construction of the new bank had various influences on Kyoto. For instance, “Kanbun Shintei” made a clear division between the river and the city. The land within the city area was developed, and became amusement zones for the public. This was called “Shinchi” meaning new town. Later, as sediments accumulated on the riverbed, the level of the riverbed rose gradually, leading to an increased risk of flood in River Kamo. As a result of the accumulation of sediments, the riverbed would break up into small streams that would flow and eventually merge into each other. There were banks among these streams, which were composed of gravel as well as shores of the river.

2. River use: The River Kamo was used for purposes such as transport, washing, fishing etc, and also its shores were utilized as retarding basins (“Ryusakuba”) that were areas where water of the river was left uncarried in case of flood. Some other uses included the usage of space for putting boats aside, building bridges and enjoying the cool breeze. This was especially an activity done during the summer months when the temperature would reach the maximum. Several reasons can be considered why such an activity of coming to the water front for enjoyment became popular. At first, it was easy to come down to the shores because “Kanbun Shintei” was situated on a low level. Secondly, the water of River Kamo was clean, making it the principal source of water-supply during the Edo period. Moreover, another reason was that this river was located very near to the center of the city area of Kyoto. At the same time, River Kamo which previously had unpleasant images such as the purification ceremony (“*Misogi*”) site, the execution ground and the place for corpses, gained good images like becoming the public entertainment site, and also the place where people used water and land daily. In this way, about the beginning to the middle of the Edo period, River Kamo began to face a “water-front” boom. It is also supposed that the taste for enjoying water spread even among the common people.